

新現象を見出すためにも不可欠である。各現象の映画やスペクトルに基づく研究によって、これらの諸性質が明らかにされ、全体像が作り上げられて、究極の目的である Martres のいう総合的研究が成し遂げられるのである。

結論として私は次の様に考える。太陽観測はその目的のいくつかを達成したが、まだ完了はしていない。また診断的方法をより明確、厳密にするために、理論の進歩は必要である。太陽大気は、研究室の実験の規模では見ることでできないプラズマ相互作用を図式的に探究できる巨大な自然の実験室なのである。そして太陽観測は、理論的な仕事と調和を保ち、理論家と観測とを隔てる壁が存在しない時、はじめてその目的を遂げられるであろう。

さらにこのことは、もっと一般の自然科学についてもあてはまるであろう。

最後に、岡崎彰氏に日本語への訳や討論をしていただいたことに感謝したい。

私は日本政府文部省の奨学生として、昭和 44 年ベトナムから日本にまいりました。現在、東京大学天文学教室で末元先生と平山先生の御指導のもとに太陽物理学を専攻しています。

桜の国に留学することは私の長い夢でした。もう一つの夢も一かなえたいと思います—将来私の国が世界各国とともに天文学に貢献できるように。

Glimps of Japan (日本瞥見)

Edwin Budding (江戸院馬人具)

このチャンスに何か私の日本での十ヶ月間の経験を書くことができうれしく思います。もちろんかぎられたスペースなので十分に書くことができません。それでも私の悪い日本語で試してみたいと思います。

まず東京天文台長及びその職員の皆さんに、とくに北村先生には感謝したいと思います。

又、こうした経験をするチャンスを、提供して下さった、日本学術振興会に心から感謝します。

一人の西洋人にとって、遠く離れた日本で、様々の人々の助けにより多くのことを学び、又、すばらしい思い出を作ることができたのは大きな喜びでした。

どうして日本へ来ることになったかに関係して—私を来日へ導びいた源は、もう 40 年も前の京都大学の竹田先生の開拓的な研究でした。この仕事はマンチェスター大学での、私の研究の指導者・コパール先生の（この人は日本の天文学に、いつも高い尊敬と特別な興味を持っていたと思います）初期のものに似ていました。北村

先生がマンチェスターのコパール先生のクラスに参加の時、近接連星とか、そんな科目の会話は、特別の暖かみで誠実な雰囲気だったとよく覚えていています。そんな雰囲気から自分の近接連星の興味は生まれました。私が、ここへ来るフ



ェローシップに応募する前には、この国のこと—歴史と地理は、かなり少ししかわかりませんでした。日本語の言葉は「はい」しか知らないでした。しかも「はい」の綴りもわかりませんでした。まあ、そんな情報は、私の目的のためにあまり大切でないと思いました。日本の科学者の論文は読めたし、偉大は学問の源は日本にあり、自分のために利益になることが、私にははっきり思われました。コパール先生と北村先生の相談のあとで、私が提案した研究のプランはよくできるだろうと見込みました。しかも日本の研究者には、私の発展させた仕事と、新しいまだ未発表のコパール先生の研究が、おもしろくなる可能性があると思いました。

日本は、私の今までの期待に答えたですか？もちろんズバリ言わなければいけないです。確かに、これまでに

このチャンスに何か私の日本での十ヶ月間の経験を書くことができうれしく思います。もちろんかぎられたスペースなので十分に書くことができません。それでも私の悪い日本語で試してみたいと思います。まず東京天文台長及びその職員の皆さんに、とくに北村先生には感謝したいと思います。又、こうした経験をするチャンスを、提供して下さった、日本学術振興会に心から感謝します。一人の西洋人にとって、遠く離れた日本で、様々の人々の助けにより多くのことを学び、又、すばらしい思い出を作ることができたのは大きな喜びでした。

も習うことはもうたくさんありました。そして、私の入用に全く適当なあらゆる本とか、観測のこととか、測定器とか、コンピューターなどが直ちに役に立ちました。東京天文台のような研究所で、私のような地位にある人の研究の範囲が、どうしてイギリスの大学の、天文学科のそんな人と相違があるのか、大きな訳が見つからないです。

過去 10 ケ月の間、私は、すでに発表した 2 つの論文——YY Gem の観測方法の予備的な記述と SZ Cam の分光的研究——に取り込んできました。私は、関連した仕事についてのさらに 2 つの論文を、今、準備中です。私は、自分の仕事について、日本天文学会の春と秋の両年会で報告し、さらに東京大学のメインキャンパスや、東京天文台、京都大学宇宙物理学教室、金沢工業大学でセミナーをしました。夏に私は日本の北の島・北海道へ行き、札幌大学の早川先生に大変暖く迎えられ、非常に楽しいパケーションを過ごしました。そして、私は日本のこの地方にいる間、科学者たちと話すいくつかの良い機会を持ちました。

他にも何か日本に期待をしましたか？ また「ええ」と答えます。そして、どんなことをやさしく推量できると思います。もっとイギリスから科学者、特別に天文学者が日本へ仕事しに来て、そして日本から科学者が、私の国へ行くことを見たいです。私の説では、大学の第一の原則はもちろん習うことです。そして、旅行して外国で勉強する人は習う過程で全く強い、場合によっては意外な、刺激（“impetus” ということ）を受けます。前の時には一度外国で仕事をしていました。それはフランスでした。日本は、私の感じではちょいちょい別のフランスみたいです。もちろん文化の相違は東と西の国で随分大きいに違いありません。刺激はだからそれに応じて増します。

読者が、それに応じてこの人は確かに日本について批判しているにちがいないと考えることを、私はたやすく

想像できます。ええと、実際はじめてここへ来たときに、私は、中国からの漢字を守って使うことはちょっと、“unscientific” といやしくも思いました。けれども、L. Walsh さんの“Read Japanese Today” という名前の本と出会って、そして意味とか漢字の起源など、百から二百のよく使う漢字の説明を読みました。こうして、“東洋の神秘” に引かれはじめていったことを認めます。さて、たとえば、“大阪市” の名前の起源の説明を、新幹線の私の隣りの席で、無関心そうにしている友人に、提供したくなりました。この学問の実用性は、何んだと自分に質問してみます。ひとつ、ちょっと誇りに思うことは、口に出してみたいです。岡山観測所を訪問したときでした。大きな銀の字で“Grabb Persons” と大きな 74 インチ望遠鏡のうしろに書いてあるのを見て、おもわずほほえみました。いろいろな同僚に“Grabb Persons” は世界で、ロールス・ロイスのような望遠鏡の製造メーカーでしょうと私は言いました。又、“Grabb Persons” のデラックスな望遠鏡を私はむこうで使ったことがあると話しました。これは、1897 年にだれか金持な産業家のおかげで作られました。そして“Setting Circles” とかその他の付属品などは、純銀でできていました。それをどう考えますか。“さあ” と一人の友達がにこにこして言いました。「岡山のはね、Grabb Person のただの Standard-type (並みのもの) ですよ。」

“Non-Scientific” の方の生活はどうですか。人々とのおりあいはどうしますか。もちろん、コミュニケーションの問題は、時々ありました。これは言語の関係でしょう。でも心の通った人々との会話の中では、どんな言語を話しても心配がなく、快よい心のつながりが、はっきりわかった時など、いつまでも私の人生にのこる暖い追憶となるでしょう。

この私のつたない日本語のくわだてを、同じ気持ちで読んでほしいと思います。(原文のまま)

1975 年 3 月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	0,	0	6	1,	1	11	1,	8	16	2,	15	21	0,	0	26	—,	—
2	1,	5	7	1,	1	12	1,	14	17	2,	27	22	0,	0	27	0,	0
3	1,	18	8	1,	1	13	1,	9	18	2,	13	23	0,	0	28	0,	0
4	1,	14	9	2,	4	14	1,	12	19	3,	23	24	0,	0	29	0,	0
5	—,	—	10	—,	—	15	2,	8	20	—,	—	25	0,	0	30	0,	0
															31	1,	3

(相対数月平均値: 11.1)

昭和 50 年 5 月 20 日	編集兼発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	森 本 雅 樹
印刷発行	印刷所	〒112 東京都文京区水道 2-7-5	啓文堂 松本印刷
定価 300 円	発行所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
			電話武蔵野 31 局 (0422-31) 1359
			振替口座東京 13595